

V 研究活動—資料報告・研究ノートなど—

1 新潟市西蒲区新谷遺跡の前期前葉縄文土器 —「新谷式土器」の細分をめぐって—

前山 精明

(1) はじめに

「弥彦・角田山塊」の北端「角田山」の東南麓に位置する新谷遺跡で1983年に行った発掘調査に際し、縄文時代前期前葉の遺物が大量に出土した。この調査で出土した土器は青森県の「表館式土器」と近縁関係にあり、新潟県内で初めて確認された良好な資料として注目された。その後この土器群は「新谷式」と命名され〔小熊2008〕、新潟県内における当該期の標識資料として位置づけられている。本遺跡の前期前葉土器については、『巻町史 資料編1 考古』で口縁部資料と底部資料を中心に192点を抽出し、筆者がその概要を記述した〔前山1994〕。しかし同書では新谷式土器の体部資料を提示しておらず、その中には土器群の位置づけにあたり不可欠な資料も含まれていた。

発掘調査から40年が経過する中で、越後平野の周辺では類似土器の出土例が次第に増加している。中でも胎内市（旧中条町）二軒茶屋遺跡から出土した多量の土器群〔水澤ほか2003〕は、新谷式土器の型式内容を理解するうえで重要な意味をもつ。新谷式土器の変遷については、いくつかの見解が示されている〔前山1994・水澤ほか2003・斎藤2006・小熊2008・寺崎2019〕。しかし共通認識がもたれる状況には至っておらず、新谷遺跡出土資料の全容把握が調査当事者としての責務と考えていた。本稿は巻町史未掲載資料の提示を当初の目的としたが、資料を再見する中で土器の含有物と文様に有意な関係が見出せるのではないか、という着想をえたことから全資料の再検討を行なった。図2～8に示す488点は、町史掲載資料181点と未掲載資料307点からなる。前者については、町史掲載番号を「史□」として併記した。このうち6・113・200・414以外は、新たに図化したものである。紙数に制約がある中で資料数が大幅に増加したため、25%縮小図となった点をお断りしておく。

以下では、提示資料の基本的な性格を(2)で明確にする。(3)では新谷式以前の土器の概要を記す。(4)では新谷式土器の特徴を含有物・形態・文様から検討し、その位置づけを(5)で考える。

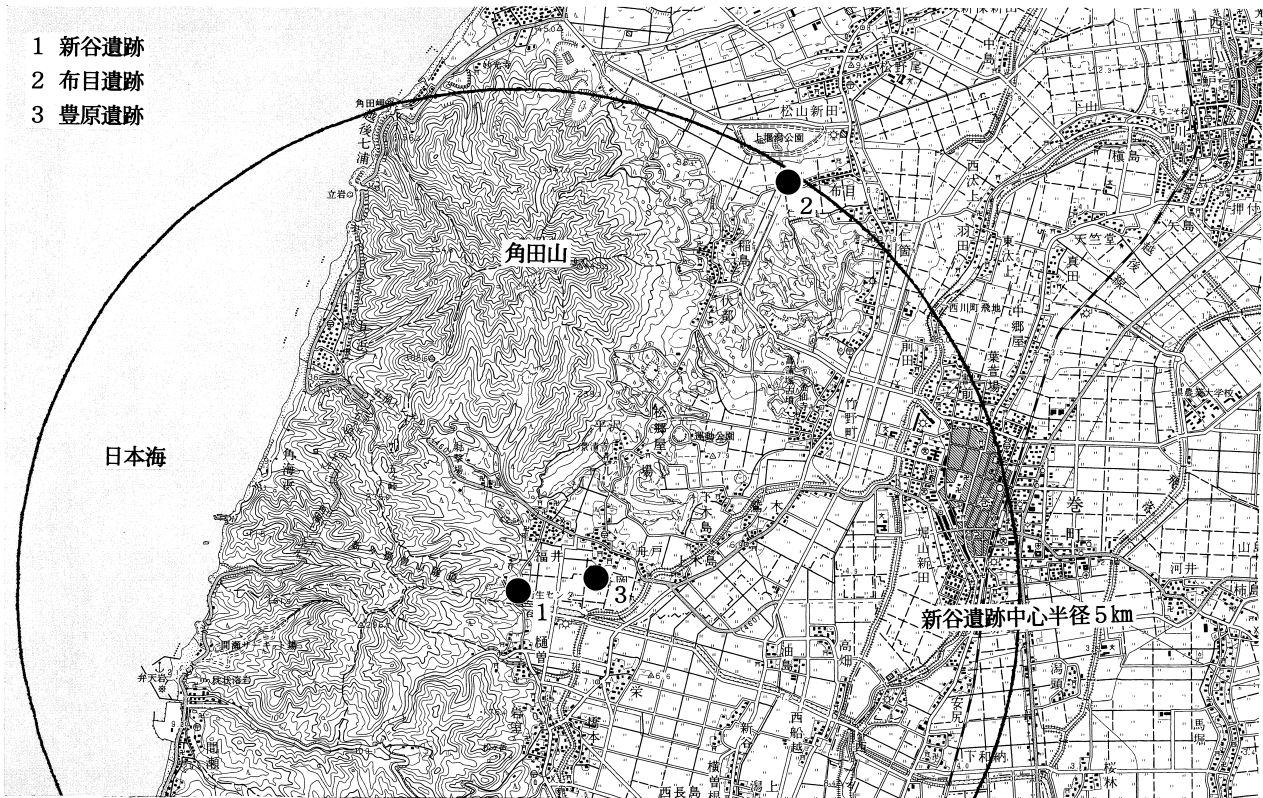
(2) 新谷遺跡の概要と提示資料

新谷遺跡は、角田山東南麓の一角に形成された幅200mあまりの小規模な扇状地上に立地する。遺跡は畑地と

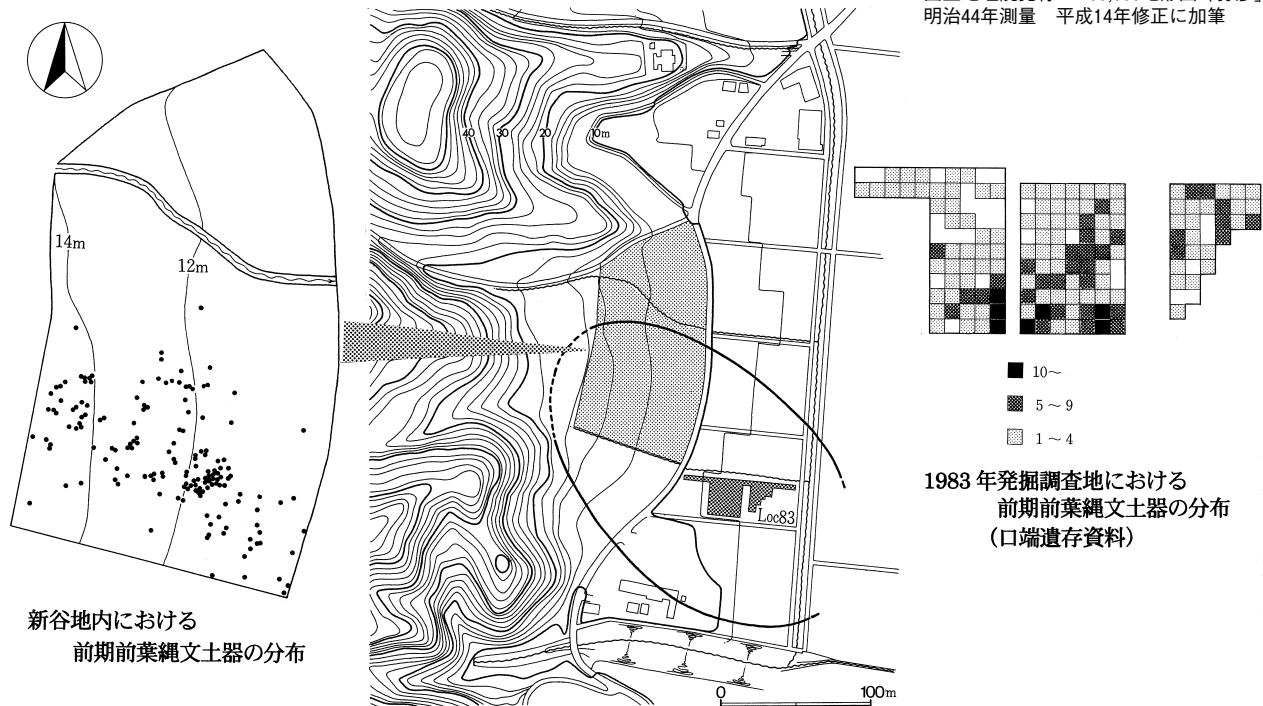
して利用される高域部の「新谷」地内とその東に隣接する水田区域の「宮前」地内にまたがりもち、全体の広がりには南北200mあまり、東西250m以上に及ぶ（図1）。本稿で示す土器の大半は、「巻町ほか三ヶ町村衛生センター」の建設に伴い宮前地内で行った1983年10月の確認調査と同年12月の本発掘に際し、未分解有機物層下に堆積する青色粘土層下部から灰黒色粘土層にかけて出土した。調査地内の基盤層上面地形は東に向かって10%ほどの斜度で下降しており、東端部での遺物包含深度は田面下2.5mに達した。

調査地は、東西Aトレンチ・南北Bトレンチからなる確認調査とその周囲を対象とした発掘調査を合わせた847㎡で、高域部のⅠ区（A・B区）、その東に接するⅡ区（C・D区）、低域部のⅢ区（E・F区）に区分できる。遺跡が広がる扇状地は沢の氾濫によって不安定な環境にあり、遺物包含層には多数の礫が混じっていた。図1左下に磨石・敲石類と石皿・台石の接合状況を示す。Ⅰ区とⅡ区では傾斜方向、Ⅱ区とⅢ区では等高線に沿った接合例が多く、土砂移動に伴う遺物の拡散化を物語る。高域部にあたるⅠ区では、焼土を伴う住居址状遺構を確認した。居住域の東端とみられ、新谷地内を中心とした東西150mあまりが本来的な遺跡範囲と考えられる。掲載資料の出土地については、図幅の関係上Ⅰ～Ⅲ区と遺構内外の別を示すにとどめた。地区別出土量はⅠ区27%、Ⅱ区56%、Ⅲ区17%で、時期差を示す有意な分布傾向は見られない。土器の多くは小破片からなり、復元個体は限られる。二次堆積の過程で生じた細片化がその理由と考えられる。

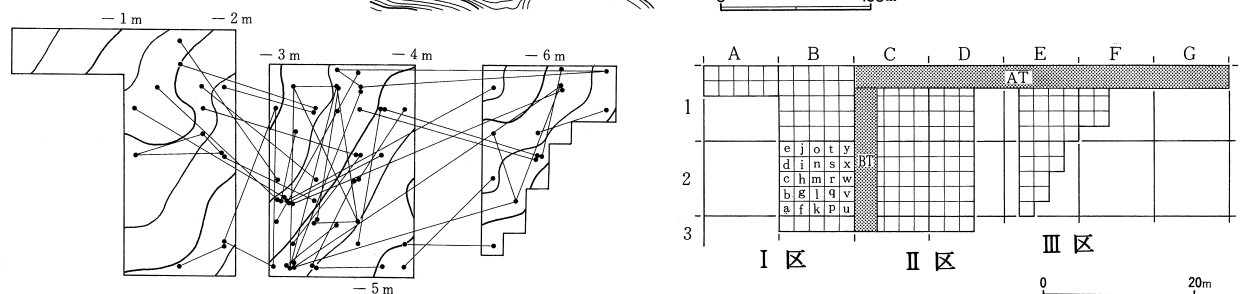
遺跡の性格を考える上で、遺物量の多さは重要な特徴となる。石器の出土数は、572点の磨石・敲石類、404点の礫石錘、147点の石皿、109点の砥石を中心に計1,354点にのぼる。筆者は以前、東日本に分布する前期前半の拠点集落において住居址30軒以上が確認された7遺跡（北海道函館空港第4遺跡・長野県阿久遺跡など）での石器出土量をもとに、1983年調査地の出土資料だけで住居址10軒分以上に相当する、という試算を行ったことがある〔前山1985〕。前期前葉の石器量としては日本海側有数の存在であり、数段階にわたる営みの中での累積的な使用・廃棄物と考える必要がある。土器は口縁部遺存資料



国土地理院発行 1:50,000地形図「弥彦」
明治44年測量 平成14年修正に加筆



1983年発掘調査地における
前期前葉縄文土器の分布
(口端遺存資料)



磨石・蔽石類と石皿の接合関係

トレンチ・グリッド設定図

図1 新谷遺跡の立地と遺物分布（中・下段の図は〔前山1994〕を一部改変）

で600個体あまりを数える。その数が石器量を下回るのはこの時期の拠点集落としては異例の現象で、その要因は次のような調査状況が大きく関係している。

1983年の本調査は、衛生センターの建設計画により年度内での発掘調査業務完了を求められたことから、12月の現地調査を余儀なくされた。800㎡あまりの調査を一个月的の期間内で行うことは到底不可能と判断せざるをえず、遺物包含層を一辺2mの小グリッドごとに旧峰岡中学校グラウンドに搬出した後、翌年2月～3月に遺物採取を行った。作業は悪天候に加え搬出土の泥土化によって困難を極めた。出土地区名を「Ⅰ～Ⅲ区」とした資料は4月に行った排土からの採集品で、本稿掲載資料の6%を占める。遺物採集時の状況を勘案すると、1983年調査地での実質的な土器量は、確認個体数の数倍に及ぶものと予想する。

(3) 新谷式以前の土器

新谷遺跡では、「新谷式」に先行する前期初頭土器も40個体はとえられている。新谷式土器の再検討にあたり少なからず重要な意味をもつことから、以下に概要を記す。掲載番号右に「新谷」と記した資料は、新谷地内からの採集品である。

図2-1～9は撚糸側面圧痕を施す。巻町史では花積下層式土器としたが、7～9についてはこれに後続する二ツ木式古段階（新田野段階）の土器とみなすべきである、とのご教示を谷藤保彦氏からいただいた。16・17は花積下層式段階の非結束羽状縄文土器で、いずれも幅広施文を特徴とする。10～13は、口縁部文様帯の下端に設けた有段部に「ハ」の字状の刺突を加え、口縁部および体部文様帯に竹管工具による平行沈線や集合沈線を施す。花積下層Ⅲ式に並行する東海系の本島Ⅷ式土器である。

14・15は、6・9～13に類似した有段器形をもち、有段部に「ハ」の字状の刺突を加える。ともに端正な形状のコンパス文をその上下に配し、前者は破片上部に撚糸文、下部に竹管沈線文、後者は上部に竹管沈線文を施す。この二例は、越後平野周辺における現時点での最古のコンパス文施文土器にあたり、その成立時期を知るうえで重要な資料となる。

18～22は、角田山北東麓の布目遺跡出土資料を標識とする布目式土器である。18は、内面が削がれた口唇・口端と遺存部下端に斜位の爪形刺突を施す。21も同様の刺突を施すが、施文方向が水平に近い点から体部の施文例と判断した。19は面どりされた口唇・口端に斜位の爪形刺突を施す。後者の施文角度は器面に対し鋭角的な点が特徴である。20は器体上部の屈曲部に2列の爪形刺突を

施す。21・22は布目遺跡で卓越する結束羽状縄文施文土器。前者は両翼ないしは片翼施文、後者は結束部の施文例である。このほか新谷式土器との峻別が難しいが、爪形刺突を施す図3-100～103や図5-273も布目式段階に遡る可能性がある。

以上のような新谷式以前の土器は、石英～長石の破碎粒子や雲母を多量に含む資料が大多数を占めており、その含有率は前者で84%、後者で71%に達する。1～22の番号末尾に示す記号は、後述の混和材区分A種が◎、B種が●、D種が○である。

(4) 新谷式土器

図2-23～図8-488に主要資料を示す。本遺跡の新谷式土器は、小熊博史氏の編年区分〔小熊2008〕に従えば、「布目式・新谷式土器様式」の「新1段階」にあたる。縄文以外の各種文様を施す有文土器が65%を占めており、口縁部文様に基づき、刺突文・竹管文・単沈線によって幅広い文様帯をもつ1類、同様の文様によって幅の狭い文様帯をもつ2類、単一工具による刺突文を器面全体に施す3類、刺突文や竹管文が口端に限定される4類、縄文のみを施す5類、文様が欠落する6類、に区分できる。以下では紙数の都合上個別説明は行わず、項目別に特徴を記す。

A 含有物

新谷遺跡の前期前葉土器は、すべての資料が植物繊維を含む。文様と同様に含有物もバラエティーに富んでおり、① 雲母・② 石英もしくは長石・③ ガラス状粒子・④ 各種岩石、の含有量と粒度、石英～長石・岩石粒子における磨耗の有無について6倍ルーペを用いて観察した。粒度は2mm以上を粗粒子とし、含有量は1cm四方あたり5点以上を多量とみなした。以上の検討に基づき、図9-Aに示す5種に区分する。このほか分類項目からは除外したが、海綿骨針を多量に含む資料（416など）が少数ながら確認できた。

A種（23～112） 雲母と石英～長石の破碎粒子を多量に含むグループ。口端遺存資料集計（以下同じ）で80個体（14%）を数える。このうち、石英～長石の粗粒子を含む資料は97%にのぼる。1983年の調査では、阿賀野川水系もしくは阿賀北産とみられる花崗岩の円礫とその破損礫が大量に出土した。これらは破碎石英～長石粒子の母材となりうるもので、土器の混和材としての利用を目的とした搬入礫とみなされる。本グループの雲母は、花崗岩での含有量をはるかに上まわることから、意図的な混合物と考える必要がある。近隣の布目遺跡から出土した石英質片麻岩〔小野・小熊1994〕は、混合雲母粒子の母材となりうる資料の一つである。

B種 (113~215) 多量含有物が石英~長石の破碎粒子に限定されるグループ。141個体 (24%) を数え、D種に次いで多い資料となる。石英~長石粗粒子の含有率は90%以上にのぼり、A種と同様に花崗岩を粉碎した混和材と判断できる。雲母の含有率は50%あまりで、A種に比べ雲母混合量が少ないケース、もしくは花崗岩の鉱物組成を反映した資料とみなされる。

C種 (216~293) 透明度が高いガラス状粒子を多量に含むグループ。96個体 (16%) を数える。ガラス状粒子は大半が微細片で、貝殻状の剥離面をもつ破碎粒子と表面が平滑もしくは丸味を帯びる粒子からなる。後者は焼成時の熔解で生じた変形とみられる。類似資料が新津丘陵の原遺跡 (中期~晩期) で多量に確認されており、新津丘陵産黒曜石を意図的に粉碎した可能性が高い混和材とみられる [前山2021]。

D種 (294~418) 石英~長石や各種岩石の微細粒子を多量に含むグループ。最多の179個体 (30%) を数える。本グループは、すべての資料が微細な磨耗粒子を含み、信濃川水系の河川砂に類似するものが多数を占める。このほか、磨耗度の高い石英の粗粒子を含む資料 (263・294・295・299~301・311・317・327) も確認できる。西山丘陵下に流れる島崎川の河川砂に類似しており、西山丘陵方面からの搬入土器の可能性を考慮する必要もある。

E種 (419~496) 灰白色を呈する破碎岩石を多量に含むグループ。C種とほぼ同数の95個体 (16%) を数える。本グループは、粗粒子と微細粒子からなるものと微細粒子に限定されるものがほぼ半数ずつを占める。この種の岩石粗粒子は信濃川水系や弥彦・角田山麓の河川砂にほとんど含まれておらず、弥彦・角田山塊に産出する流紋岩や凝灰岩を意図的に粉碎した混和材とみなされる。

A種~E種の関係 A種~E種における雲母・破碎石英~長石粗粒子・ガラス状粒子・磨耗粒子・破碎岩石粗粒子の占有率を図9Bに示した。算出数値は口縁部遺存資料に基づく。5種の含有物は出現率の上で連続的な流れを見せており、これによって各グループの関係が明らかになる。

混和材A種とB種は、雲母と破碎石英~長石粗粒子の含有率が高い点で近似する。しかしB種の中にはガラス状粒子を多量に含む資料が存在し、磨耗粒子含有率がA種を上回る点でC種やD種に近い要素をあわせもつ。C種は、磨耗粒子の含有率がD種に次いで高く、破碎石英~長石粗粒子や破碎岩石粗粒子の含有率においてもD種との近縁関係がうかがえる。D種は雲母が皆無に等しく、ガラス状粒子を多量に含む資料が大幅に低下する点でE種に類似する。その一方で、E種は破碎石英~長石

粗粒子や磨耗粒子含有率がD種に比べ大幅に低下しており、相対的に独立性の高いグループと言える。

新谷式以前の土器 (花積下層式・布目式段階) の数値を同図最上段に示した。この段階における混和材区分の内訳は、A種72%・B種21%・D種5%・E種2%である。含有物の内容においてもA種との類似性が一見して明らかであり、次に述べる文様区分との関係と共に、A種からE種までの混和材グループに存在する時間差を示唆する特徴となる。

5種の混和材グループにおける口縁部文様1類~6類の占有率を図9Cに示す。各グループはきわめて安定的な組成内容を見せており、特定の文様区分に偏ることなく1類・4類・5類の主要三者から構成される。三者の出現率を混和材グループ別に見ると、A種とB種では幅広い口縁部文様帯を形成する1類が30%台を示すのに対し、C種~D種ではその半分ほどの数値に留まる。

新谷式土器は、後半にあたる「新2期」または「大湊式」 [寺崎1996] の段階に至り1類が激減し、4類主体へと移行することが大きな特徴となる。C種~E種に認める1類占有率の相対的な低さは、そうした動きが「新1期」の期間内で既に生じた可能性を示唆する。これを混和材利用の在り方から言い表せば、新谷遺跡では存続期間内において遠隔地産混和材にあたる粉碎花崗岩 (A種・B種) から在地産の河川砂 (B種) や粉碎岩石 (E種) へと転換し、その移行過程でガラス状粒子 (C種) を利用した時期があった、という流れが想定できる。以下ではそうした見方の妥当性を検討する。

B 土器の形態

本遺跡の新谷式土器は、深鉢と浅鉢からなる。後者は混和材A種の60とB種の200に限定されており、新谷式土器の中での時間差の指標とはなりえない。後述の文様に比べ土器の形態は変化に乏しいが、4項目に分けて特徴を記す。

口端の断面形 ① 内面を削ぎ取る49・129・141・310・445など、② 端部を平坦に成形する71・464など、③ 丸味をおびる30など、④ 先端が尖る95など、に分かれる。新谷式以前の土器は、①が大多数を占める。新谷式ではその率を半減させるが、各グループで40%前後の安定した数値を示している。

これに対し②・③の占有率は、A種・B種とC種~E種の間で異なりがある。②はA種で41%、E種で21%、③はA種・B種で16%、C種~E種で25%前後を示し、両者が補完的な動きをみせる。

口縁部 波状口縁と平縁の別がある。1類の多くは波状形態をとるようで、波頂部が双頂をなす資料がA種

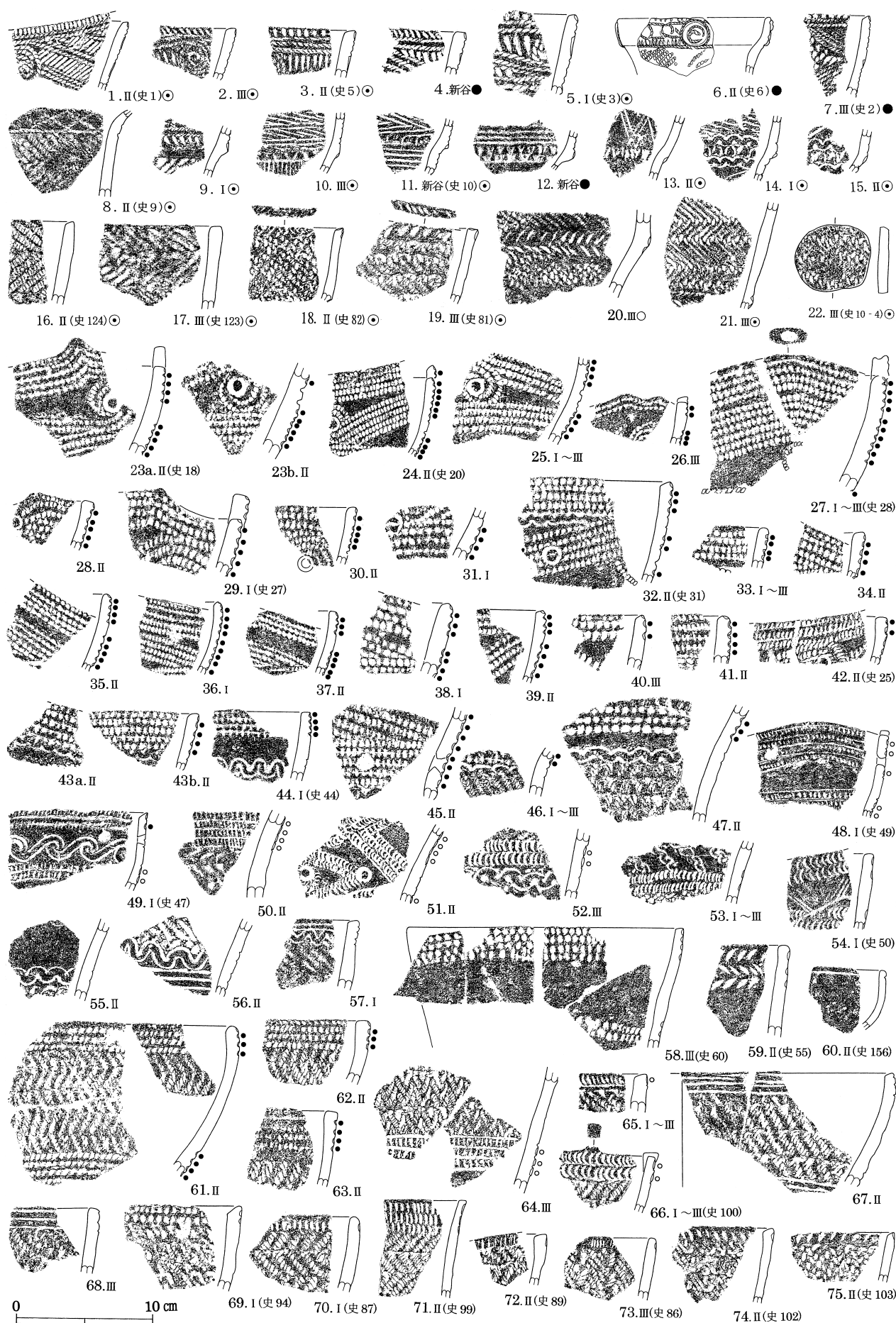


図2 新谷式以前の土器（1～22）と新谷式土器混和材A種（23～35）

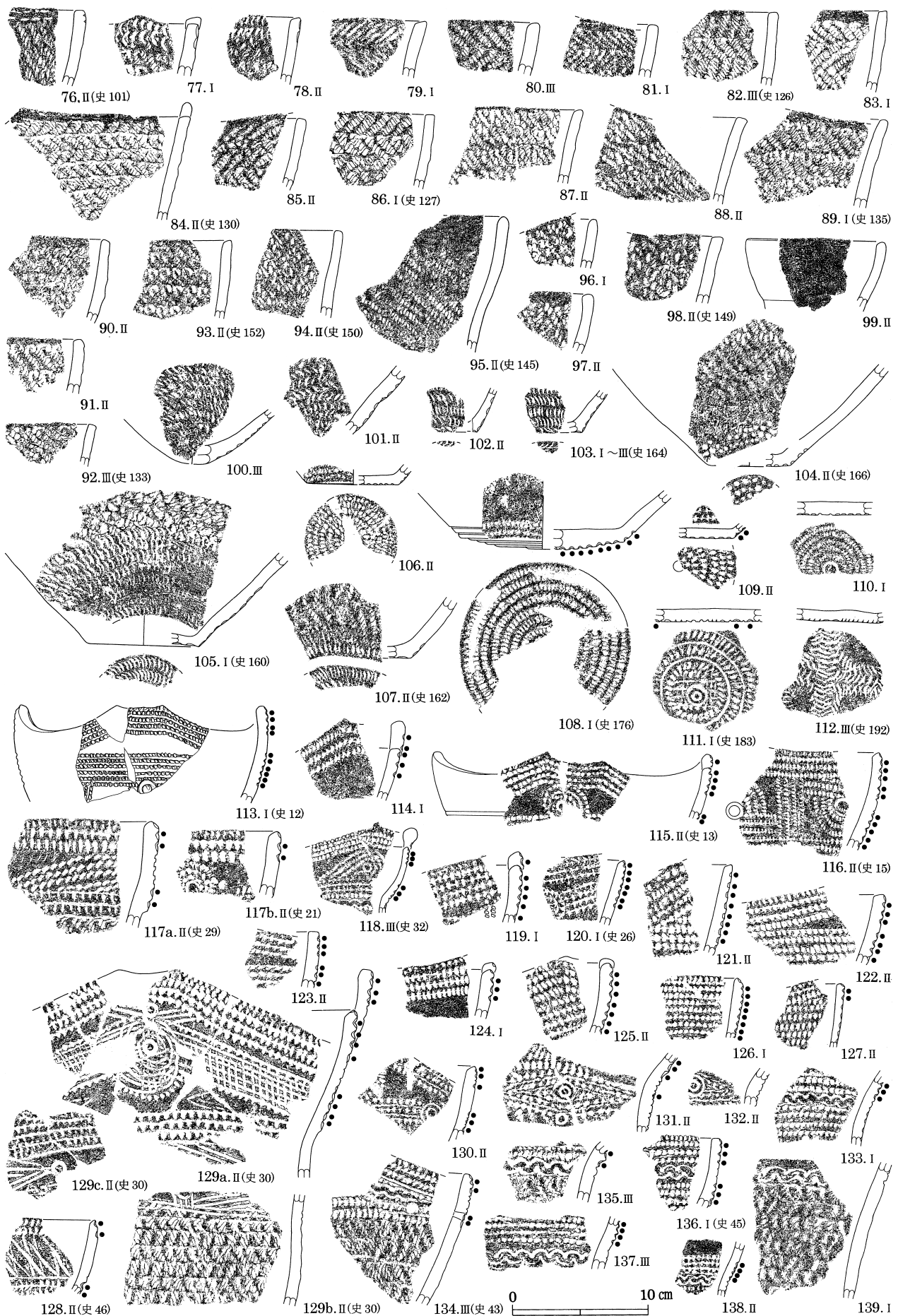


図3 新谷式土器混和材A種(76~112)とB種(113~139)

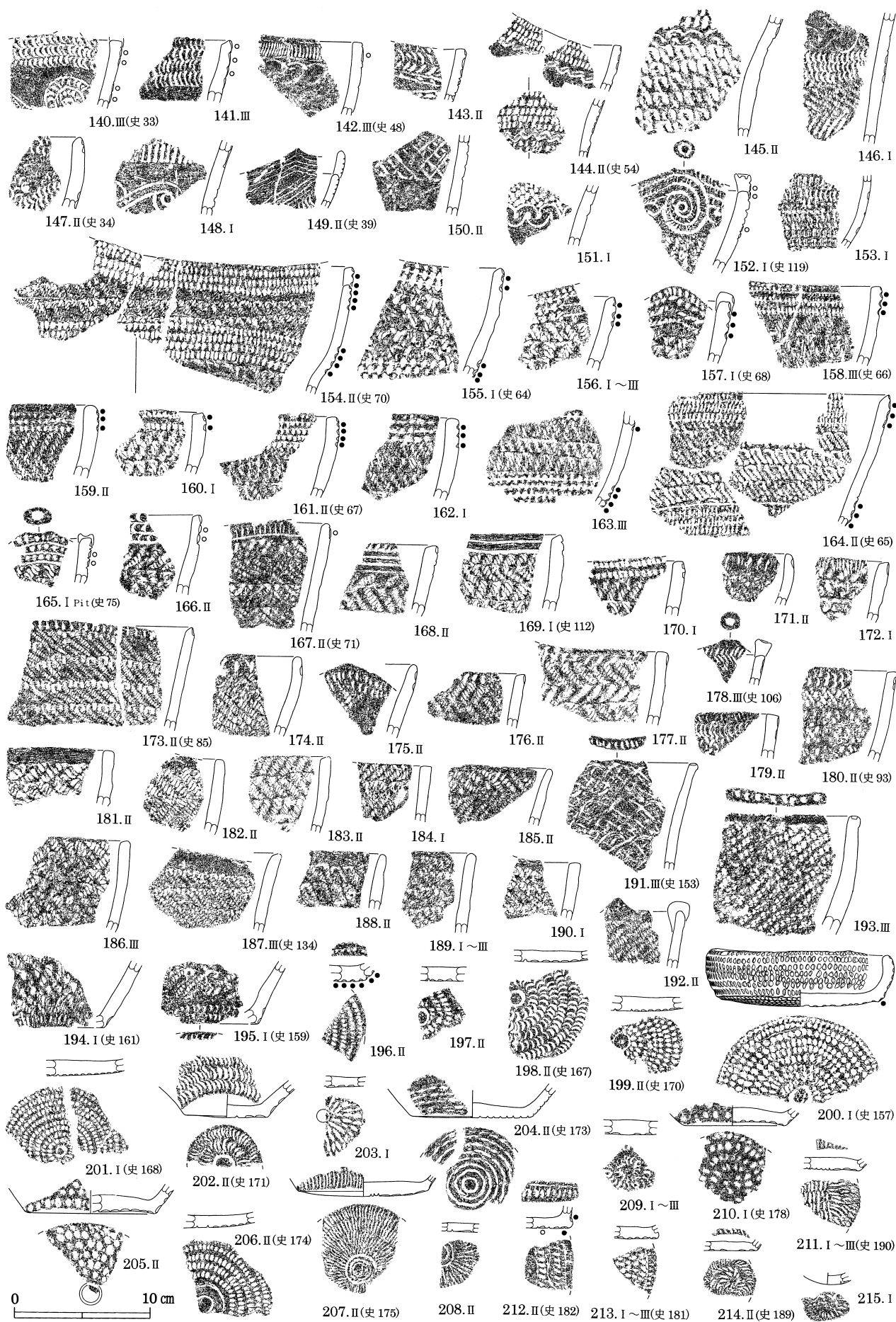


図4 新谷式土器混和材B種 (140～215)

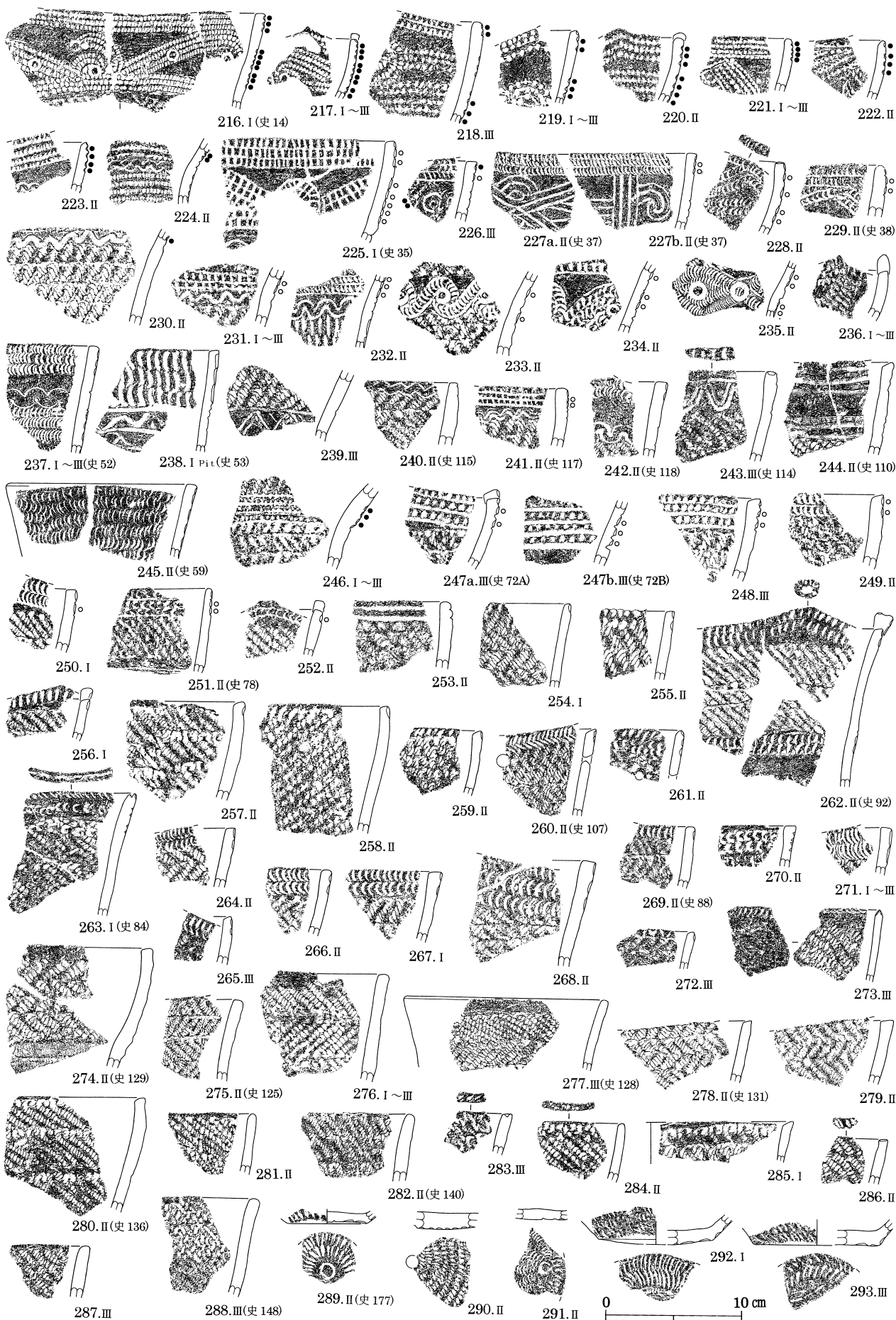


図5 新谷式土器混和材C種 (216~293)

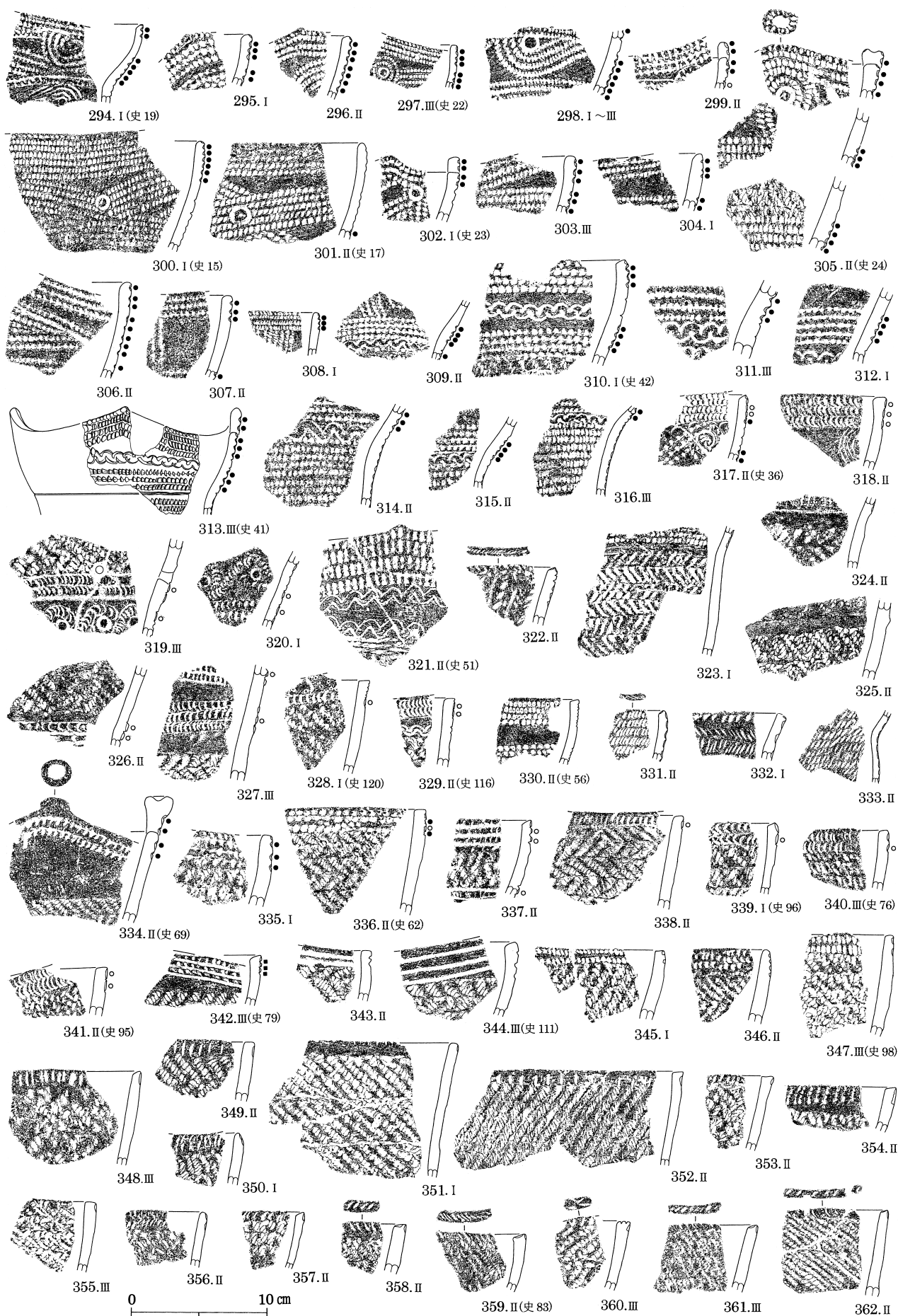


図6 新谷式土器混和材D種 (294~362)

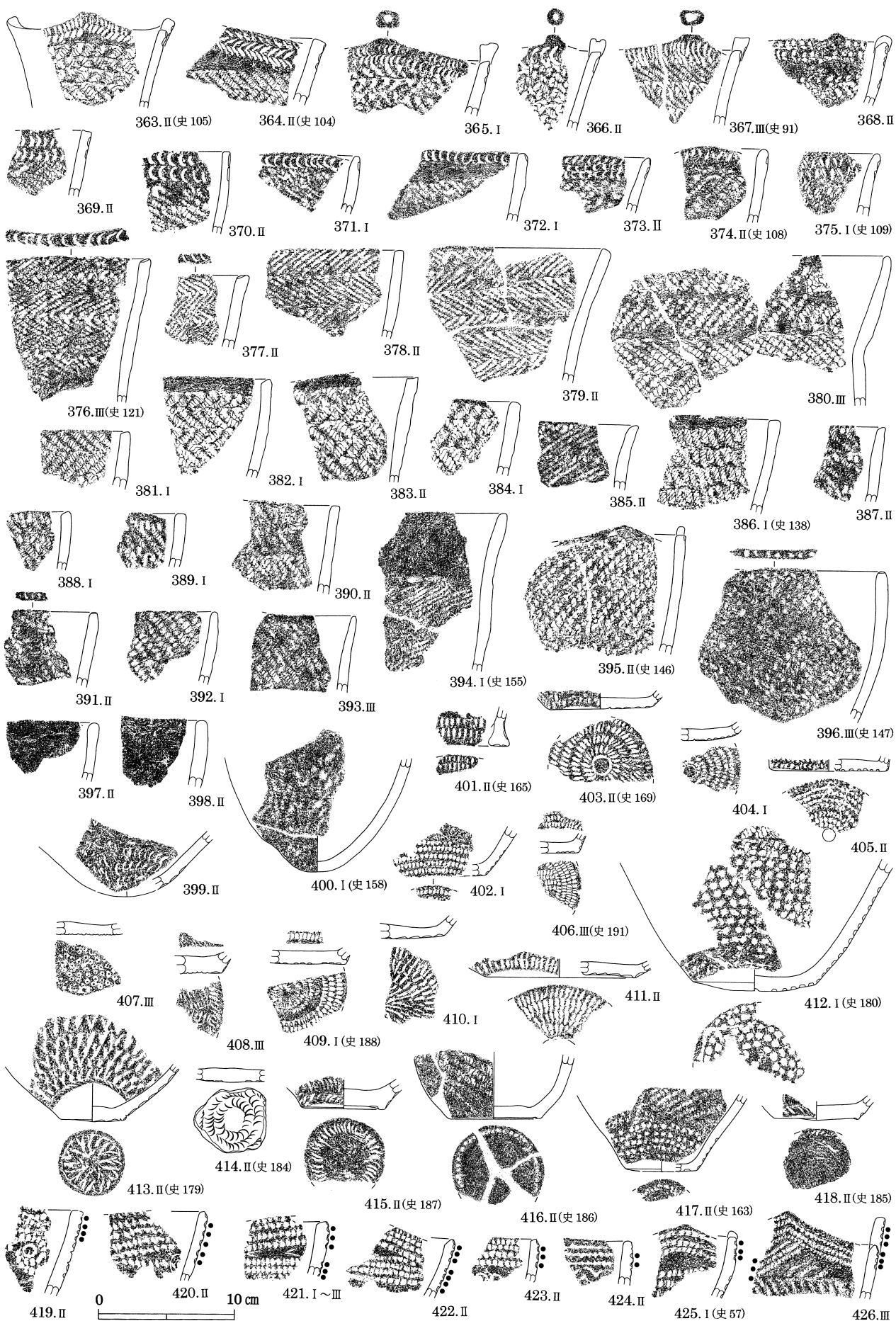


図7 新谷式土器混和材D種(363~418)とE種(419~426)

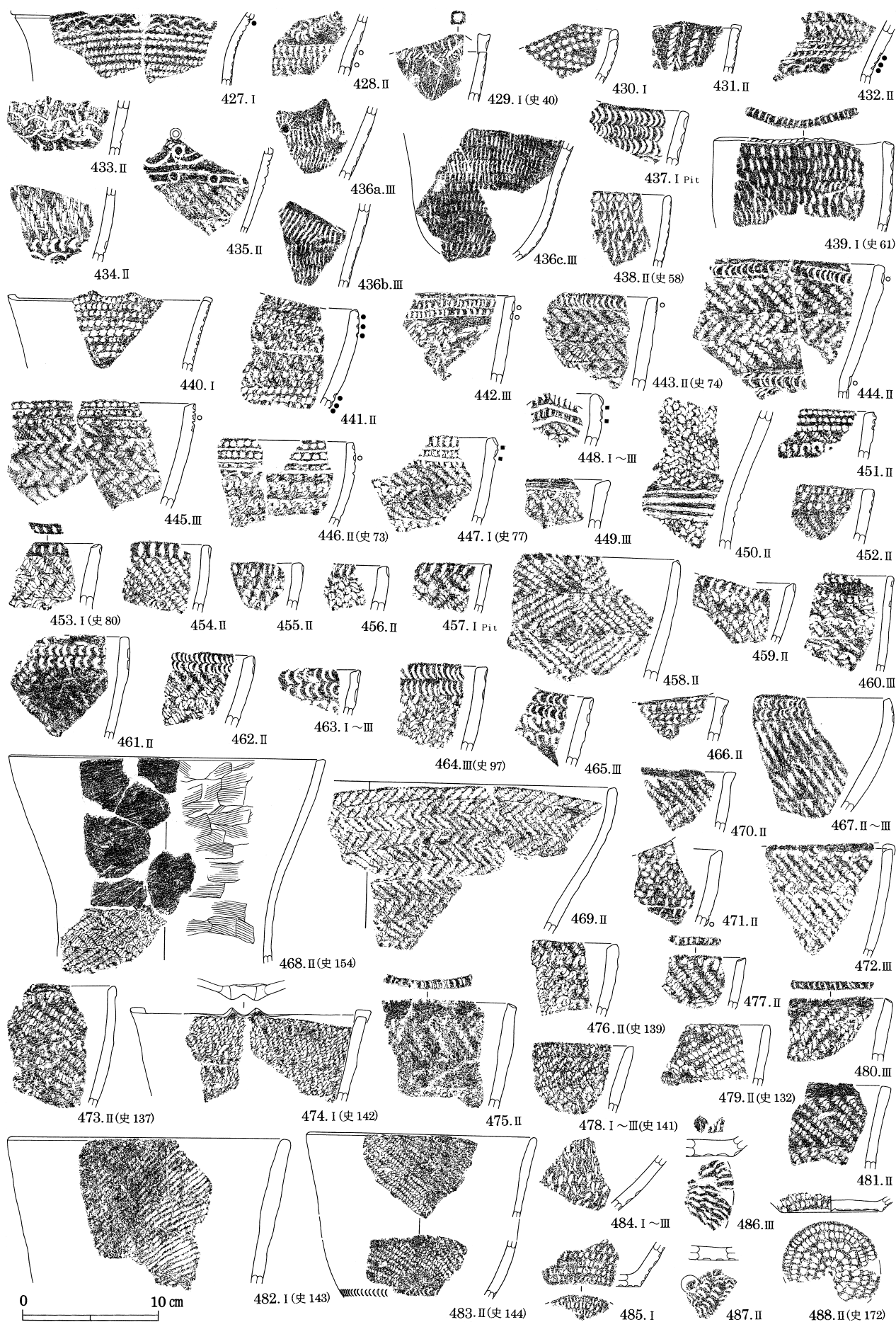
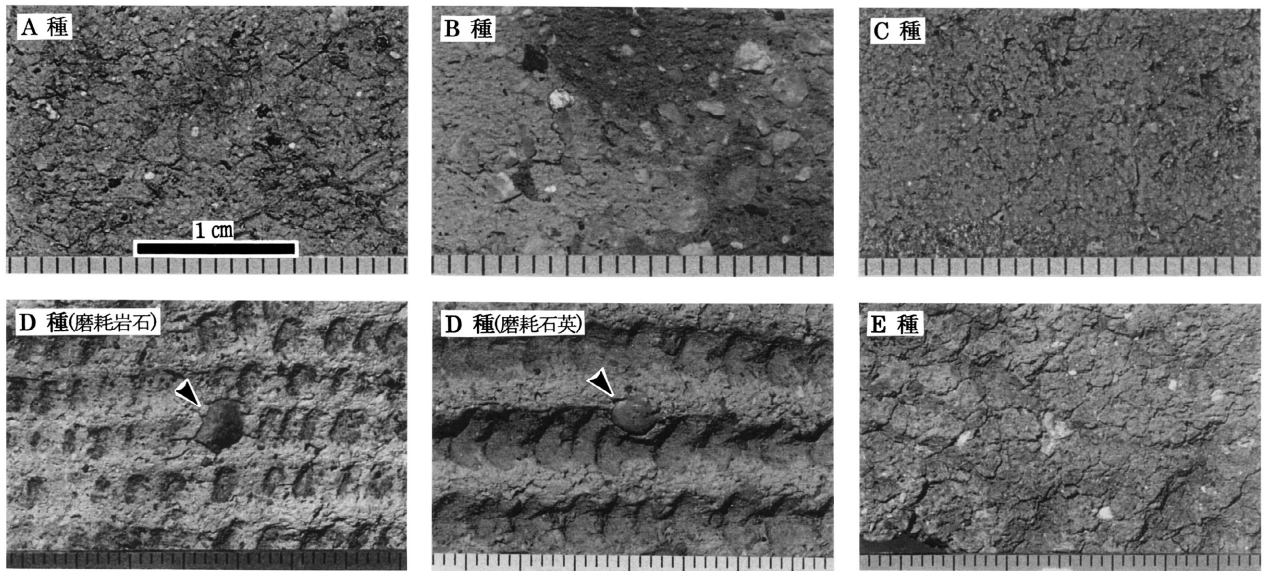
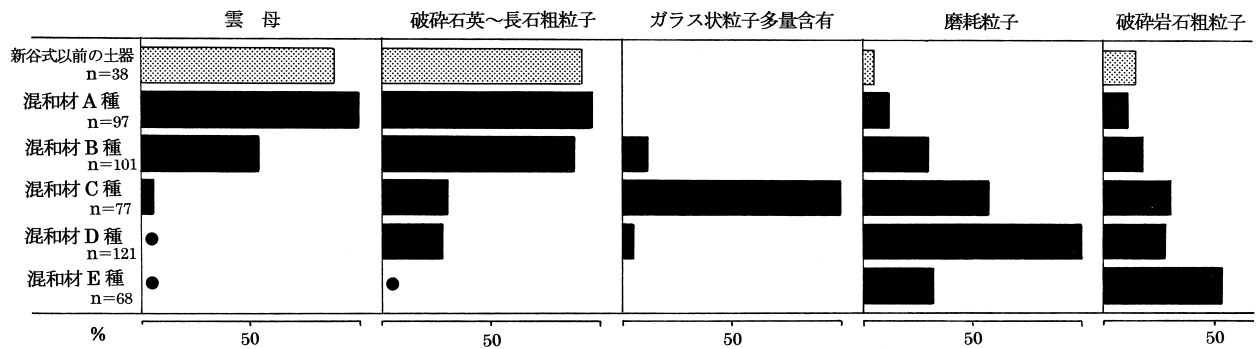


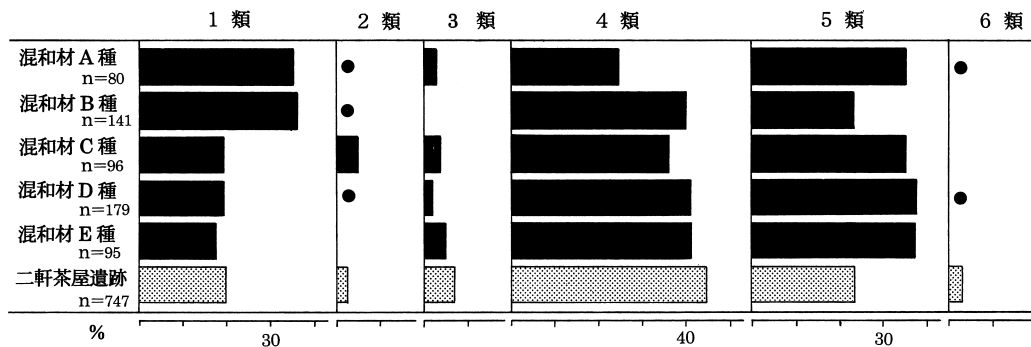
図8 新谷式土器混和材E種 (427~488)



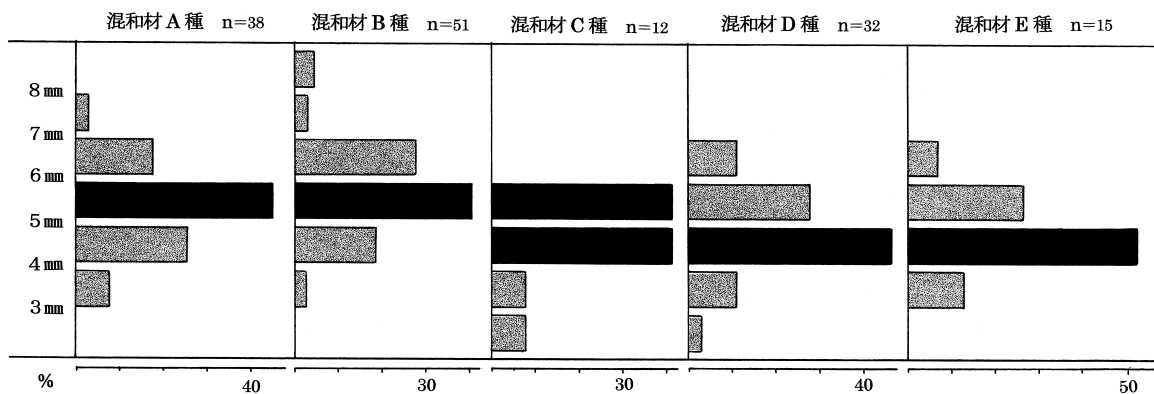
A 混和材 A 種～E 種の土器



B 前期前葉土器の含有物

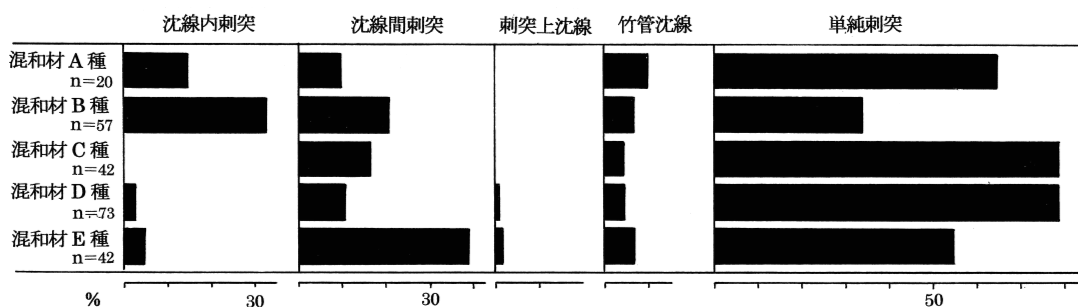


C 新谷式土器の口縁部文様別占有率

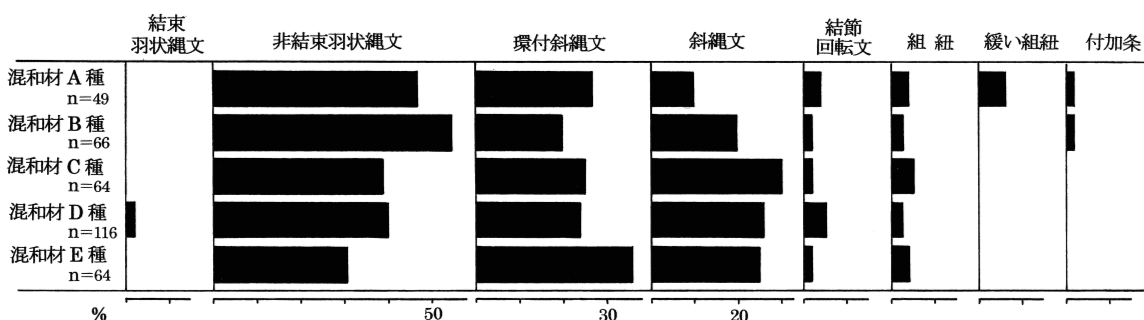


D 沈線内刺突文の刺突幅

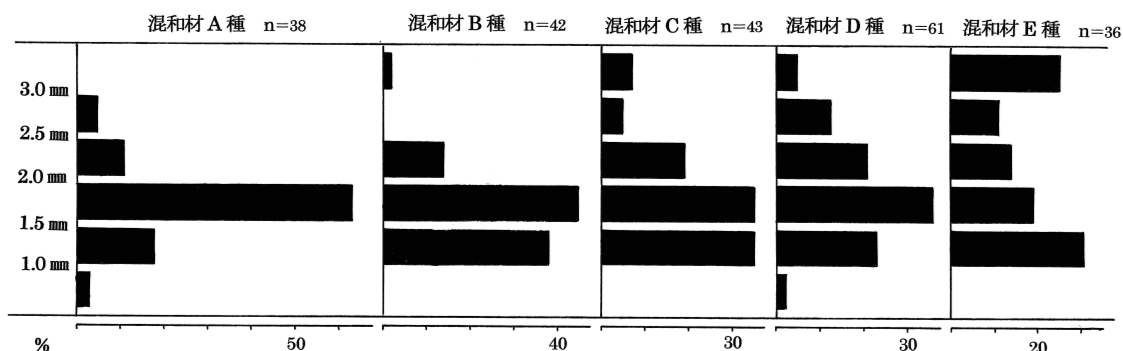
図9 新谷式土器の含有物と文様



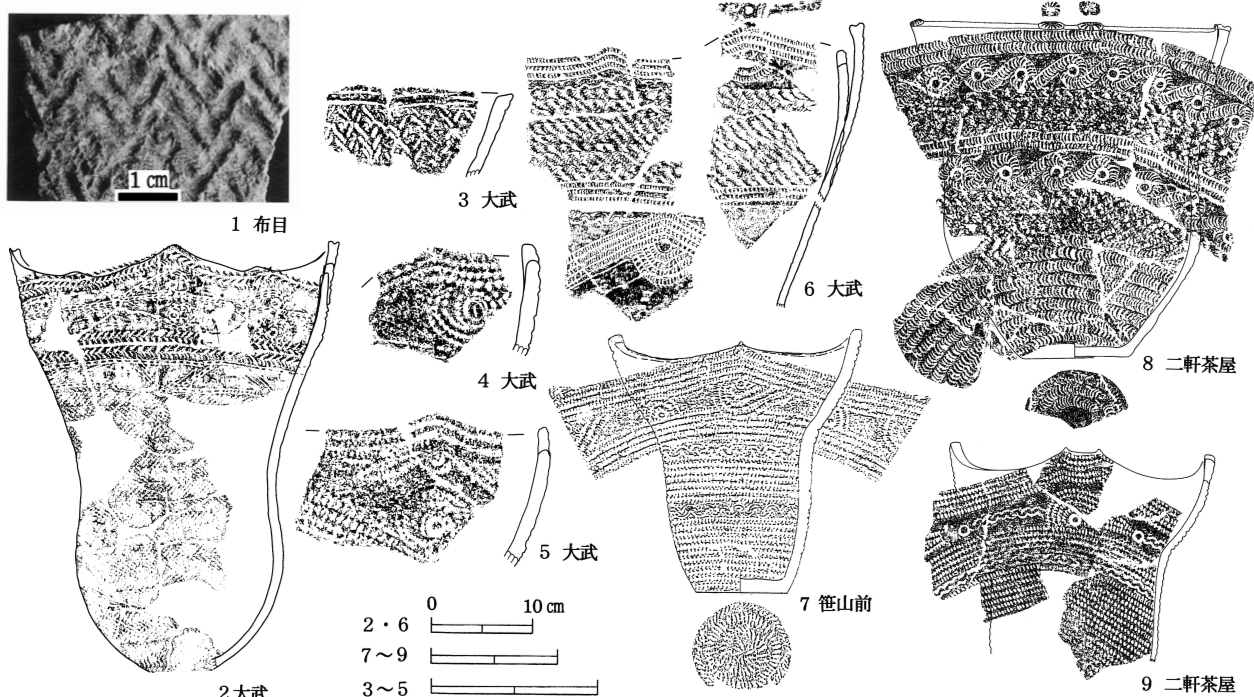
A 4類土器の文様



B 縄文原体と施文構成



C 縄文の一施文幅



D 越後平野周辺の布目式・新谷式土器

図10 新谷式土器の文様と越後平野周辺の布目式・新谷式土器

(23・26・28・29)、B種(113～115・129)、C種(220)、D種(295・296・321)、E種(430)に存在する。4類の多くは平縁であるが、B種～E種には波状口縁が見られる。この中には波頂部の正面形が台形をなす資料がB種(165・178)・C種(252・262)・D種(334・363・365～367)に8例あり、うち6例の波頂部に円形や楕円形の彫去を施す。1類に属すD種の305やE種の429も形態が類似しており、D種を中心とした口縁形態とみなされる。

体部と底部 体部と底部の器形は変化が乏しく、D種の一部に多様化をうかがわせる資料が見られる程度である。333・380は器体上部が屈曲し、401は下端が大きく張り出す例である。

底部は平底と丸底の二者からなる。両者を合わせた底部個体数を『巻町史』では200以上と記したが、132個体に訂正する。平底土器の底面形態は、①丸底ぎみの108(A種)・292(C種)・412(D種)など、②狭義の平底にあたる106(A種)・204(B種)・293(C種)・403(D種)など、③弱い揚底をなす210(B種)・415(D種)など、④縁辺部が弱い揚底をなす205(B種)・289(C種)・411(D種)の別があるが、特定の混和材グループへの偏りは見られない。

丸底と特定できる資料は、100(A種)・215(B種)・400(D種)の3個体である。『巻町史』では全面に縄文を施す400を新谷式以前の土器としたが、次のような留意点がある。1983年調査で確認できた底部個体数は、口端遺存資料の五分之一にすぎない。その要因としては、刺突文が欠落する丸底底部が細片化し底部資料としてカウントされていない恐れがあり、5種の混和材グループにおいて丸底土器が多数存在することも充分考える必要がある。

土器のサイズ 口径推定資料が17個体ある。内訳はA種2点・B種2点・C種3点・D種3点・E種7点で、最多を数えるE種の割合は41%となる。この数値はE種自体の占有率16%に較べ明らかに高く、小型個体の増加を示す現象と考えられる。底径推定資料は23個体ある。最大個体は108(A種)の13.3cmである。11.5cmの浅鉢200(B種)がこれに次いで大きく、大型土器の割合がA種やB種で相対的に高い傾向を示すことをうかがわせる。

C 土器文様

本項冒頭に記した口縁部文様区分の内訳を以下に示す。器面全体の文様構成を把握できる資料が乏しいため、体部破片の中には不明確な資料が含まれる。

混和材A種は、23～49・54が1類、57が2類、61～78が4類、79～98が5類、99が6類である。58・59は3類として集計した。後者については新谷式以前の土器では

ないかという見方もあるが、新谷式の一バリエーションと見なした。50～53・55は1類の口縁部文様帯下端もしくは体部文様、56は1類もしくは2類の体部文様とみられる。

混和材B種は、113～150が1類、152が2類、154～180が4類、181～193が5類である。151は1類もしくは2類の体部文様とみられる。153は爪形刺突と原体不明の圧痕を交互に施すもので、3類と同様に器面全体を覆う可能性がある。

混和材C種は、216～232・236～238が1類、240～244が2類、245が3類、246～273が4類、274～288が5類である。233～235は、1類もしくは2類の体部文様とみられる。

混和材D種は、294～318・321～324・327が1類、328・329が2類、330～333が3類、334～375が4類、376～396が5類である。319・320・326は1類もしくは2類の体部文様とみられる。325は5類体部の可能性があり、397・398は5類もしくは6類の口縁部である。

混和材E種は、419～432・435が1類、437～440が3類、441～467が4類、468～483が5類である。433・434は1類もしくは2類の体部文様。436は1類と3類の中間的な特徴をもつ。

刺突文のバリエーション 新谷式土器の有文資料を特徴づけるのは、刺突文の多用と刺突工具の多様性にある。刺突文は工具の形状によって7種のバリエーションが見られる。①先端が尖った多裁竹管工具による「点状刺突」(69・170・255・345・451など)、②先端が平坦な多裁竹管工具による「線状刺突」(70・173・256・348・452など)、③4裁～3裁された竹管工具による「弧状刺突」(77・180・268・341・461など)、④製作者自身の爪または二枚貝の腹縁を用いた「爪形刺突」(100～103・149)、⑤工具の先端が丸みを帯びた「凹点刺突」(104・412・486など)、⑥径3mmほどの茎状工具による「中空刺突」(222・328・330・336・445・446)、⑦工具先端に凹凸をもつ「櫛状刺突」(148・236・321・324・354など)の別である。

以上7種の中で、爪形刺突は布目式土器に多用される刺突文である。弧状刺突に較べ工具の先端が先鋭な点に特徴があり、主としてA種とB種で使用される。これに対し、中空刺突はC種～E種の中に施文例があり、D種で最多の4例を数える。

刺突文様 帯状文様のレイアウトを意図した竹管平行沈線の中に刺突を施す「沈線内刺突文」(23・119・219・295・419など)、竹管平行沈線の中間部に刺突を施す「沈線間刺突文」(50・167・225・338・442など)、刺突文を施した後沈線を加える「刺突上沈線文」(342・447・448)、

刺突をダイレクトに施す「単純刺突文」に区分できる。このうち沈線間刺突文は、線状刺突による「梯子状文」(48・152・225など)、弧状刺突による「連続爪形文」(65・140・229・339など)、凹点刺突や中空刺突による「沈線間列点文」(445・446)に分かれる。断面・拓本に示す●は沈線内刺突文、○は沈線間刺突文、■は刺突上沈線文。

沈線内刺突文は1類と4類で使用される。後述のように、4類土器ではA種とB種で施文頻度が高く、体部下端や底面の刺突施文においても同様の特徴が見られる(108・109・196・212)。この種の刺突文には点状刺突が多用されており、混和材区分別にみた一施文幅を図9Dに示す。A種・B種は5mm台にピークをもつ。B種は6mm以上の資料も多く、太形化傾向がみられる。C種は4mm台が増加し、D種・E種では4mm台に明確なピークを形成する。C種を境とした刺突文の繊細化は、レイアウト沈線の施文法にも表れる。C種～E種では沈線文の施文が概して浅く、刺突文が痕跡的な資料(219・317など)や単純刺突との峻別が難しい資料(300・301など)も見られる。

梯子状文の刺突間隔は、混和材グループによって若干の違いがある。A種では密に施すのに対し(48～50・64)、C種やD種には施文間隔の広いものが現れる(225・231・247・248・337)。沈線間列点文は、中空刺突の使用頻度と関連し、混和材D種とE種にのみ存在する。刺突上沈線文もD種とE種に限定されており、沈線間刺突文の変異形とみなされる。このほか、D種の中に見られる隆帯貼付文(326・327)は沈線間刺突文と同様の刺突を施し、平行沈線を隆帯に置換した例と考えられる。

1 類土器の文様帯 1類を特徴づける幅広い口縁部文様帯は、複数の帯状刺突列によって重帯化させる資料と単帯化する資料の二者からなる。前者はA種(27)とB種(113・129)にのみ存在する文様パターンである。後者はB種～D種に見られ、文様帯下を縄文帯とする117・134(B種)・216(C種)・305・310・311(D種)と体部全体に単純刺突を施す224(C種)・313～316(D種)・427(E種)に分かれる。このほか、体部縄文帯の中に帯状刺突列を施す47・51～53(A種)や口縁部文様帯の直下に体部文様帯を配す129・131(B種)や294(D種)のような例もある。

1 類土器の帯状刺突列 1類土器の口縁部文様帯には、帯状刺突列による区画文様が描かれる。この刺突列は5種の混和材グループごとに特徴を異にする。

A種では沈線内刺突文の多用を特徴とする。帯状刺突列の口端に1列の単純刺突を加える手法が一般的で、A種の施文率は91%に達する。こうした中で、41・42は単

純刺突を併用する数少ない例である。後者は幅広い刺突工具を使用し口端刺突が欠落する点においてB種的な要素を認める資料と言える。

B種の中には口端に2列の単純刺突を施す129のような資料が存在する。その一方で刺突文の欠落資料(121・123・130)は21%に増加する。B種では単純刺突の施文頻度が上昇する傾向にあり、蕨手文を単純刺突で描く117や、上部3列以下を単純刺突とする127のような例が見られる。刺突列の加飾化も特徴で、沈線内刺突と爪形刺突を交互に施す130～132・212は、B種に限定された施文手法である。

C種の口端刺突施文率は63%に低下する。216・220～222は欠落例である。蕨手文が単純刺突によって描かれる218・236や帯状刺突列が竹管平行沈に置換された227は文様の簡略化を表す。帯状刺突列に沿って一条の単一沈線を施す221・222は、加飾化を示す施文例である。

D種とE種の口端刺突施文率は25%を示し、299・302～304・306・307(D種)・424～426(E種)で単純刺突が省略される。沈線内刺突列に単沈線を添えるD種の299は、C種と同様の加飾手法である。E種の口縁部文様は簡略化が進行する。425は沈線内刺突列の下に設けた無文帯に横位の単純刺突列を施す。429・430は弧状刺突や点状刺突によって文様帯を描き、426は口縁部文様帯の下端を区画する刺突列が省略されたケースである。

1 類土器の蕨手文 1類の蕨手文は、沈線内刺突・沈線間刺突・単純刺突による帯状刺突列や竹管沈線・単沈線によって描かれる。このうち大多数を占めるのは沈線内刺突列による施文例である。全体的な文様構成は明らかでないが、①刺突列が大きな波状をなし、その頂点と下端に配す23～25・32(A種)・117(B種)・216・217(C種)など、②波状口縁の波頂下に短く配す113・115(B種)・305・309(D種)など、③縦位の刺突列で区画された文様帯の中に短く配す116(B種)・227(C種)に分かれる。

以下はいずれも少数資料となる。129(B種)は波状口縁の頂部下に格子目沈線を複合させながら単一沈線によって蕨手文を描く特異な土器である。沈線内刺突による施文例は、C種の225(C種)に限定される。直線的な連続山形状をなし、下端に環状の刺突列を配す資料である。149(B種)・236(C種)は単純刺突による施文例で、前者は爪形刺突、後者は櫛状刺突を用いる。竹管沈線による施文例も2例にとどまる。227(C種)は、縦位区画沈線や連続山形沈線に接しながら簡略化された小さな蕨手文を配す。294(D種)は体部文様帯の中で確認できる唯一の例で、沈線内刺突文が省略されたケースとみられ

る。

蕨手文の形状はバラエティーに富んでおり、① 端正な渦を巻く23・25 (A種)・419 (E種)、② ラフなタッチで描く129 (B種)、③ 渦が不明瞭な115・118 (B種)、④ 渦が半円状をなす116 (B種)、⑤ 円形竹管を環状に取り巻く120 (B種)・218 (C種)・297 (D種) など、⑥ 渦をなさない294・298 (D種) の別がある。A種は①に限定され、②～④はB種、⑤はB種とC種、⑥はD種に見られる施文パターンである。なお、419はE種で唯一の蕨手文となるが、E種の中では異質な資料であり、時期を異にする可能性を指摘したい。

以上のような蕨手文には、円形竹管文を加える資料が大多数を占める。C種の219やD種の294は省略されたケースであり、後述のような底面文様との整合性がうかがえる。

連結S字状文 S字状文を連続的に配す文様で、1類の口縁部文様帯や2類もしくは4類の体部文様帯に描かれる。140 (B種)・233 (C種) は沈線間刺突列、147 (B種)・428 (E種) は単純刺突列、49 (A種)・435 (E種) は竹管平行沈線によって施文され、本遺跡で多用される沈線内刺突列による施文例が欠落する点が大きな特徴となる。連続爪形文を施す資料はB種～E種の中に6例あり、うち5例 (233・234・319、320・428) がC種～E種に属す。先述のように、3種のグループは弧状刺突文占有率の上昇を特徴としており、連結S字状文の出現頻度と整合的な動きを見せる。

コンパス文 真正なコンパス文 (47・55・139など) と縦や横に流れる波状コンパス文 (44・242・321など) に大別できる。上部だけを施文する317 (D種) や環状に施す226 (C種)・317 (D種) は、コンパス文の変異形と言えるものである。このほか、単一沈線による波状文がB種 (144) とC種 (230・231) にある。

1類におけるコンパス文の施文部位は、口縁部文様帯の内部 (32・43・134・136・223・237・310・313・321・423・424など) と口縁部文様帯の下端 (45・46・118・133・224・225・309・311・314～316など) が一般的である。

口縁部文様帯内部の施文例で、蕨手状刺突列との複合資料はA種の32のみで、これ以外は口縁部文様帯に設けた無文部に1～2列のコンパス文を充填する。このうち44は口端の単純刺突列が欠落し、A種の中では簡略化を認める資料である。B種～E種には、体部全体を単純刺突で覆う資料が見られ、D種の4例 (313～316) を最多とする。A種に確認できないことから、時期的な指標となりうる施文パターンと言える。

体部にコンパス文を施す資料 (53・55・56・151・432～

434) も見られる。無文帯の中に1列配すケースが基本となるが、A種の53は斜位に等間隔に施文し、E種の433は縄文上に施す唯一の資料である。

格子目沈線文 単一沈線による格子目沈線文を配す資料がA種とB種に3例ある。A種の111は、底面中央付近の環状沈線内に格子目沈線を充填する資料である。B種の129は口縁部文様帯の中央に設けた横位区画と蕨手文の中、150は口縁部文様帯の下端または体部文様帯に斜位の格子目沈線文を施す。

2類土器の文様 口縁部に幅の狭い文様帯をもつ2類土器は、コンパス文・波状文・沈線間刺突・竹管沈線文を文様要素とし、コンパス文の施文例が6割台の高率を示す。沈線内刺突が欠落する点にも特徴があり、1類土器との施文原理の異なりをうかがわせる。152 (B種) は沈線内刺突列による端正な形状の蕨手文を波頂部に配し、その左右にコンパス文を施す。波頂部に円形竹管文を加える唯一の資料である。

4類土器の文様 沈線内刺突文・沈線間刺突文・刺突上沈線文・竹管沈線文・単純刺突文の5種からなり、それらの施文頻度を図10Aに示す。沈線間刺突文はA種 (61～63) とB種 (154～164) で高率を示し、B種の32%を最高値とする。沈線内刺突文はE種 (442～446) で39%、単純刺突文はC種 (254～273) とD種 (345～375) で80%の高率を示す点が特徴である。

本類で多用される単純刺突文は、布目式土器から受け継がれる文様である。使用工具や施文法によってバラエティーがあり、① 点状刺突による列点施文 (69・170・255・451など)、② 線状刺突による縦位施文 (71・172・262・348・454など)・③ 横位施文 (76)・④ 斜位施文 (74・178・260・364・458など)・⑤ ハ字状施文 (272・374・375)、⑥ 多裁竹管工具による弧状刺突文 (77・180・268・366・463など) に区分できる。A種とB種は縦位の線状刺突 (70～73・171～177)、C種～E種は弧状刺突 (263～271・365～373・460～467) が高率を示し、布目式土器で卓越する斜位刺突は概して低率にとどまる。

底面文様 平底土器の底面には、すべての資料に刺突文が施される。文様には次のような9パターンが確認できる。① 中央に円形竹管を配し、同心円または放射状に刺突を施す110・200・289・403・488など、② 円形竹管の周りに環状沈線を描き、その周囲に刺突を施す206、③ 二重円形竹管の周囲に刺突を施す207・208、④ 二重円形竹管の周囲に環状沈線を描き、内部に格子目沈線、周囲に刺突を施す111、⑤ 円形竹管が欠落し、同心円または放射状に刺突を施す209・407・412～414、⑥ 縁辺部に刺突列がめぐり、内部に直線的な刺突列を

配す211・291・406・408、⑦ 刺突列を十字に配す112、⑧ 刺突列が渦をなす214・409、⑨ 縁辺部にめぐる1～2列の刺突列に限定される415～418、の別である。以上の中で、④・⑦はA種、②・③はB種、⑨はD種にのみ確認できる。このうち文様が簡略化された⑨は、時期差を示す可能性が高い特徴的な施文パターンである。

円形竹管文の施文例は24個体ある。底部資料の数が多いB種とD種を見ると、その施文率は前者で78%、後者で27%となり、著しい差異が見られる。刺突文にも異なりがある。沈線内刺突はA種(108・111)とB種(200・212)、沈線間刺突はB種(212)、点状刺突と爪形刺突の併用例はB種(200・212)に限定され、A種とB種の近縁関係がうかがえる。

5 類土器の文様 縄文以外の文様が口縁部に欠落する5類には、口端に無文部をめぐらす資料が各グループに存在する。このうちD種とE種では394・468のような幅広い無文帯を設けるものがあり、D種の397・398も体部に縄文を施す可能性がある。

本類では体部に縄文以外の文様を施す資料も見られる。C種の274は横位凹線、E種の471は沈線間刺突文を施す例で、体部に隆線を配すD種の325も5類の可能性があり、ここに列記した資料はC種～E種に属しており、口縁部文様の省略化に伴い生じた施文パターンとみられる。

新谷式土器は、口縁部～体部を広く縄文で覆う場合においても体部下端に刺突施文を行うことが特徴で、体部下端にのみ刺突文を施す483はその好例と言える。D種の416は刺突文が欠落する唯一の例で、底面文様が縁辺部の列点状刺突に限定される点からも、文様の簡略化を表す典型的な事例となる。

縄文 使用原体と施文構成から、① 結束羽状縄文(376・377)、② 非結束羽状縄文(84・183・275・377・469など)、③ 閉端環付斜縄文(92・187・257・386・476など)、④ 斜縄文(95・193・262・394・441など)、⑤ 結節回転文(93・180・285下段・390・442など)、⑥ 組紐(98・288・391・464など)、⑦ 緩い撚りの組紐(64・73・97)、⑧ 付加条文(94・191)に大別できる。

以上8種の別が明らかな395個体での出現率を図10Bに示す。非結束羽状縄文はB種、環付斜縄文はE種、斜縄文はC種で最高値を示し、これら3種の多寡を軸に各グループの出現率が補完的に推移する。結節回転文と組紐は低率ながらも安定的に存在するが、結束羽状縄文はD種に少数確認できるのみである。緩い撚りの組紐はA種、付加条文はA種とB種に限定される縄文である。

図10Dに縄文の一施文幅を混和材グループ別に比較し

た。A種は1cm台後半に明確な集中をみせる。B種も1cm台後半をピークとするが、1cm台前半の資料が増加し、C種的な要素が加わる。C種とD種ではB種の類似するものの、2cm以上の幅広施文例が増加する。E種は1cm台前半の幅狭施文例と3cm以上の幅広施文例が増加し、二極化することが特徴である。以上のような在り方は、「幅狭等間隔施文」を基本としながらも、C種を境に幅広施文例が増加する過程を示している。

(5) 新谷遺跡出土土器の位置づけ

新谷遺跡の存続期間内において土器の混和材に変化が生じたのではないか、という想定のもとで新谷式土器の特徴を前項で検討した。一般的な縄文土器論とは異なる変則的な手法を用いた理由は、一つの出来事由来とする。筆者は以前、本遺跡の東1kmに位置する豊原遺跡の整理作業に際し、Ⅱ群土器(諸磯a式期)とⅢ群土器(諸磯b式期)、Ⅴ群土器古段階(新保式Ⅰ期)とⅤ群土器新段階(新保式Ⅱ期)の移行過程で含有物が劇的に変化する現象を知り、土器の胎土がもつ変遷指標情報としての一面を実感した〔小野・前山ほか1988〕。

前項で述べたように、5種にわたる混和材グループには、文様との間に概ね良好な対応関係を見出すことができた。中でも刺突文や縄文の施文幅に認める連続的な変化は、上記のような想定を明示する特徴と言える。混和材と型式の整合性を探る中で土器の変遷を具体的に検討することが可能になった。ただし、留意すべき点がある。新谷式以前の土器にD種やE種が少数ながらも含まれることから明らかなように、5種のグループは編年区分の一つの目安に過ぎない。古様相をもった蕨手状刺突列や二重円形竹管文がE種に存在する点は端的な例であり、型式論に基づくチェックが不可欠な作業となる。

今回の再検討をつうじて導き出される新谷式前半段階の土器群は、凡そ混和材A種→B種→C種・D種→E種の順に主体資料が変化したとみて差し支えなからう。おそらく、変遷実態としては複数の混和材グループが共存しており、① A種を主としB種が付随する段階、② B種を主としA種が残存する段階、③ C種・D種を主としB種が残存する段階、④ E種を主としD種が残存する段階、の設定も可能である。前述のように、5種の混和材グループは、幅広い口縁部文様帯を描く1類の占有率、沈線内刺突文の施文頻度や刺突文の施文幅、格子目沈線文や二重円形竹管文の有無、平底底面における円形竹管文の施文率、縄文原体や縄文の施文構成、縄文の一施文幅などでB種とC種を境とした違いが見いだせる。よって本稿ではこれをもって新・旧に二大別し、①・②の段

階をⅠ期、②・③の段階をⅡ期とする。本遺跡を特徴づける蕨手状刺突列の在り方に基づけば、Ⅰ期は端正な渦を巻くⅠa期（①段階）と文様帯の単帯化や簡略化が始まるⅠb期（②段階）、Ⅱ期は渦の消失や加飾化を特徴とするⅡa期（③段階）と蕨手状刺突列が激減するⅡb期（④段階）に細分することもできる。各時期における土器様相の詳細については今後の検討課題とするが、越後平野周辺でまとまった資料となる長岡市大武遺跡〔春日ほか2013〕および胎内市二軒茶屋遺跡出土土器と本遺跡の関係を現時点での認識をもとに考える。

円形竹管文を伴う蕨手状の捺糸側面圧痕土器（二ツ木式古段階）が大武遺跡から出土している。大武では捺糸側面圧痕を沈線間刺突に置換した布目式古段階の図10D-2や、新谷Ⅰa期の蕨手状刺突列と酷似する同図4・5も出土しており、新谷式土器成立までの流れを大まかに辿ることができる。大武遺跡の新谷式土器は、布目段階に比べ出土量が減少するものの、Ⅱa期に比定できる同図6が存在しており、新谷遺跡とは概ね全期間をつうじて平行関係にあったことをうかがわせる。前述のように、新谷遺跡の混和材D種の中には島崎川の河川砂と類似した粒子を含む資料が存在する。両遺跡の混和材レベルでの比較を検討課題としたい。

二軒茶屋遺跡では、新谷Ⅰa期までの資料が皆無に等しく、新谷遺跡との間には若干の時期差が見られる。図10D-9は蕨手状刺突列が渦を巻いておらず、新潟市江南区笹山前遺跡の同図7とともに新谷Ⅱa期に比定できる土器である。二軒茶屋遺跡では連続爪形文（図10D-8）が多用され、新谷遺跡との様相の異なりをめぐって見解が分かれる〔水澤ほか2003・小熊2008・寺崎2019〕。新谷では連続爪形文と同様の施文具を用いた弧状刺突文がⅡ期の4類土器で高い割合を示しており、この段階において施文基盤自体は醸成されていたことがうかがえる。二軒茶屋を特徴づける「連結S字状文」は沈線内刺突文と疎遠な関係にあり、蕨手状刺突列とは系列を異にした土器の可能性が高い。

二軒茶屋遺跡の報告資料をもとに集計した口縁部文様別出現率を図9C下段に示す。二軒茶屋ではⅠ類が20%にとどまると共に4類が高い割合を示す点で混和材C種～E種（Ⅱ期）の在り方と類似する。新谷遺跡において平底底面の円形竹管文施文率がB種（Ⅰ期）とD種（Ⅱ期）で大きく異なることを前項で指摘した。二軒茶屋の報告資料で底面文様の構成が明らかな70例のうち円形竹管文施文資料は21例あり、その出現率30%は新谷D種（Ⅱ期）の27%と近似する。ここに示した二つの数値は、両遺跡が新谷Ⅱ期において平行関係にあったことを示してお

り、連結S字状文の多寡は遺跡間変異に由来する現象と考えるべきである。

ところで、新谷式土器の大きな特徴は、類似資料の広がりや北海道の南部や下北半島、青森県から能登半島に至る日本海側、福島県浜通りまでの広大な範囲にわたる点にある〔前山1986・谷藤2005など〕。こうした分布域の形成過程を明らかにするためには、確かな時間軸に基づきながら各地の土器を検討する必要がある。土器編年が最も整備された関東地方との関係については土器様相を異にする部分が多いが、およそ次のような対比が可能であろう。

新谷遺跡のⅠ類土器に見られる「双頂波状口縁」は、二ツ木式終末段階から関山Ⅰa式にかけて一般的な形態である。新谷Ⅰa期を特徴づける渦状の蕨手状刺突列は、二ツ木式古段階（新田野段階）の捺糸側面圧痕を忠実な形で刺突に置き換えたもので、両者の間に大きな時期差が存在したとは考えにくい。Ⅰa期に属す可能性が高い図3-129は本遺跡の中で個性的な土器であるが、波頂部直下に配す左右対称形の斜位沈線が二ツ木式後半段階の主幹文様に通じるところがある。これに対し、Ⅱa期の図5-225・227aは、蕨手文が直線的な山形文に変化し、半円形または環状の文様を谷部に配す点において関山Ⅰ式に一般的な文様と類似する。Ⅰa期の土器に描かれるコンパス文は、関山式に多用される文様である。しかし、本遺跡の新谷式以前の資料の中には端正な形状のコンパス文が既に存在する（図2-14・15）。埼玉県や群馬県内の二ツ木式にも施文例があり〔谷藤2005〕、新谷式土器の上限を求める上での指標とはなりえない。Ⅰ期の縄文を特徴づける「幅狭等間隔施文」は二ツ木式に盛行する手法で、関東地方では関山Ⅰ式期に入り「幅広異間隔施文」が現れる〔黒坂1984〕。新谷Ⅱa期に見られる施文幅の広がりやⅡb期における幅狭・幅広施文への二極化現象は、施文構成の違いを別とすれば関東地方と軌を一にした動きと見ることができる。混和材A種の中に少数ながらも確認できる「緩い撚りの組紐」は、東北地方南部の二ツ木式段階の土器に見られる特殊な縄文である。越後平野の周辺でも同様の資料が大武遺跡の布目式新段階（図10D-3）や布目遺跡（同図1）に存在しており、新谷Ⅰ期の編年的位置づけにあたり有意な資料となる。以上列記した事項に基づけば、Ⅰ期は二ツ木式終末段階、Ⅱ期は関山式Ⅰ期に平行する土器群と位置づけるのが妥当であろう。

最後に、今後の課題を明確にしておきたい。広大な分布域を形成する新谷式類似土器は、広域編年を進める上で格好の資料となることが60年以上前から認識されてい

た〔林1960〕。この種の土器の分布域の形成過程については日本海側を経由した北上伝播説が有力であるが〔林1960・工藤2002・小熊2008など〕、その一方で南下説〔武藤1988〕も提示されている。本稿で示した新谷式土器前半の変遷案に基づきながら各地の集成資料〔大沼1989・工藤2002・斎藤2006・堀江2006・新海2007〕を概観すると、I a期に遡る土器は北海道や東北北部で確認できず、越後平野の周辺で成立した可能性も充分考慮すべきである、と筆者は考えている。新谷式に先行する布目式土器については近年細分化が行われ〔寺崎2019〕、新谷式への移行段階の設定もなされている〔伊比2010〕。しかし新谷式I a期の間には依然として型式的な隔たりがあり、出自の究明が課題となる。

新谷式土器と類似資料に見られる広大な分布域は、異なる視点からの位置づけにも必要である。新谷遺跡は、後氷期の温暖化によって縄文時代早期の日本海側に出現した多雪地帯に位置する初期定住集落の一つである。新谷式類似土器の広がりや、巨視的に見れば現在の積雪地帯と重なり合う部分が多い。筆者はかつて、その範囲が縄文時代前期の遺跡低密度地帯〔Koyama1978〕や礫石錘多出遺跡の分布域とも重複する点に着目し、これを積雪地帯適応初期の姿と考えた〔前山1986〕。

現在の新潟市域は、新潟県内において典型的な小雪地帯にあたる。新谷遺跡が形成されたところは気候が温暖で、当時の積雪量はさらに少なかったであろう。冬季の季節風が佐渡でブロックされ、新潟市に小雪化をもたらす現象が最近実証された〔Kusaka, Suzuki, Yabe, Kobayasi2023〕。雪陰効果は風下150km以上に及んでおり、エリア内に位置する福島県塩喰岩陰遺跡やその延長部に位置する中通りの獅子内遺跡から新谷I a期の土器が少量ながらも出土している〔堀江2006〕。列島を横断するこの段階の分布域は「佐渡ブロック」による小雪地帯が情報伝達ルートとなった可能性があり、前期前葉地域圏の実態を集落の活動領域などを含めた多角的な観点から検討する作業を進めたい。

本稿作成にあたり、寺崎裕助氏・谷藤保彦氏・斎藤準氏からは主要資料を実見していただき、種々のご教示を賜った。お礼申し上げます。

文献

伊比博和 2010 「縄文時代前期初頭から中葉の土器について」『谷地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査事業団
大沼忠治 1989 「東釧路式土器研究の現状と課題」『東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』縄文文化検討会

小熊博史 2008 「布目式・新谷式様式」『総覧 縄文土器』『総覧縄文土器』刊行会
小野昭・前山精明ほか 1988 「巻町豊原遺跡の調査」『巻町史研究』Ⅳ 巻町
小野昭・小熊博史 1994 「布目遺跡」『巻町史 資料編 1 考古』
春日真実ほか 2013 『大武遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査事業団
工藤 大 2002 「早稲田第6類土器と表館式土器について」『リングサイド』Ⅱ P.P.C.F同好会
黒坂慎二 1984 『深作東部遺跡群』大宮市遺跡調査会
Kusaka, H, Suzuki, N, Yabe, M, Kobayasi, H 2023 「The snow shadow effect of Sado Island on Niigata City and the coastal plain」『Atmospheric Science Letters』24-11
Koyama, S 1978 「Jomon Subsistence and Population」『Senri Ethnological Studies』2
斎藤 準 2006 「新潟県における縄文前期前葉の土器について」『第19回縄文セミナー 前期前葉の再検討』縄文セミナーの会
新海和広 2007 「秋田県内の縄文時代前期初頭～前期前葉土器群の様相再検討」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第21号 秋田県埋蔵文化財センター
谷藤保彦 2005 「表館式土器に関する一考察—広域分布から見た視点—」『北奥の考古学』河西勸先生還暦論文集刊行会
寺崎裕助 1996 「縄文時代前期前半の土器について」『清水上遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査事業団
寺崎裕助 2019 「第2章 縄文土器 第2節 土器 第3項 前期」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
林 謙作 1960 「宮城県桂島貝塚出土の前期縄文式土器群」『考古学雑誌』第46巻第3号 日本考古学会
堀江 格 2006 「南東北の様相」『第19回縄文セミナー 前期前葉の再検討』縄文セミナーの会
前山精明 1985 「新谷遺跡M地点における縄文時代前期の様相」『研究発表会—新潟県の考古学—発表要旨』研究発表会実行委員会
前山精明 1986 「多雪地帯の遺跡—新潟県新谷遺跡」『季刊考古学』第15号 雄山閣
前山精明 1994 「新谷遺跡」『巻町史 資料編 1 考古』
前山精明 2021 「信濃川最下流域における土器の混和材」『千曲川—信濃川流域の先史文化—』津南町教育委員会
水澤幸一ほか 2003 『二軒茶屋遺跡』中条町教育委員会
武藤康弘 1988 「東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究」『考古学雑誌』第74巻第2号 日本考古学会